

# 成果報告書

記入日 2020年 9月 3日

フリガナ：( サイドウ ケイ ) 氏 名：西道 奎	渡航先国名 (イスラエル)	留学先の所属機関：ハイファ大学、I' LAM 帰国後の所属機関：京都大学
研究テーマ： 交流と相互理解の諸相：ユダヤ人とアラブ人の生活と異文化交流から見えてくるもの		
研究期間： 2019年9月～ 2020年8月( 1年0ヶ月)		
<p>研究成果(概要)</p> <p>異文化交流をテーマに留学した。そこには、さまざまなルーツを持つ人々の暮らしがあつた。歴史、文化、政治的認識の隔たりは、そこに住む人々を「交わらない隣人」にしていたが、それでも、その見えない壁に抗う声が、いつもどこかで聞こえた。</p>		
<p>研究成果(詳細)</p> <p>私たちは、あるものに名前をつけることによって、そのものが何であるかを認識し、またそのイメージを膨らませることができる。では、私が留学していたその地域、あるいはその国を、私は何と呼ぶべきなのだろうか。私はイスラエルに留学した、のだろうか。その地域をイスラエルと呼ぶとはいったいどういうことなのだろうか。かつて、パレスチナと呼ばれていたその地域を。</p> <p>ハイファ大学で、2019年9月から2020年6月まで、秋学期と春学期の2学期間過ごした。そこでの学びは私の視野を大きく広げ、また、大学で知り合った友人たちとの会話の中にも多くの発見があつた。「共生都市」と呼ばれるハイファ。この国において唯一、マジョリティであるユダヤ人とマイノリティであるアラブ人(「政府の定義するところのユダヤ人」=「国民」とされるこの国において、そこから排除されたアラビア語を母語とする人々)が共に、平和的に暮らす都市だといわれている。ハイファ大学では、ユダヤ人とアラブ人がおおよそ半々の割合で学んでいる。</p> <p>この国では、高校までアラブ人とユダヤ人の通う学校が原則異なる。アラブ人学校ではアラビア語で授業が行われ、休日はキリスト教とイスラームに基づいて決まる。一方、ユダヤ人学校ではヘブライ語、休みはユダヤの祝祭日に基づく。学校が分れているから、高校を出るまでは、同じハイファに住んでいても、ユダヤ人であればユダヤ人以外と、アラブ人であればアラブ人以外と、ほとんど話したことがなかったという話を幾度となく耳にした。ただし、一部例外的に、ユダヤ人とアラブ人が共に学ぶ混合学校がある。ある時、二人の友人と学校教育制度の話をしていて、「将来子供ができたなら、どの学校に通わせたい?」と一緒に話していた二人に聞いた。その内の一人、ユダヤ人の彼女は「自分の子供には共に暮らすことを学んでほしいから、混合学校に入れたい」と言った。けれど、もう一人のパレスチナ人の彼は、「それはだめだ、アラブ人はアラブの文学を、アラブとパレスチナの歴史を、学ばなければいけないから」と言った。「共生というのならまず、ユダヤ人はアラビア語を学ぶべきだよ」とも彼は言っていた。それを聞いたユダヤ人の彼女は少し意表を突かれたような顔をしていた。</p>		

いったいどれだけのユダヤ人が、この国の不均衡の根深さに気づいているだろうか。アラブ系市民がヘブライ語を流暢に話す姿を見ていると、ヘブライ語を母語さながらに話すのは当たり前だと思ってしまう。しかし、しばらく滞在すれば、それは決して当たり前のことではないのだと気づく。この国でヘブライ語と同等の地位にないアラビア語を母語とするアラブ系市民たちは、生きていくための言葉としてヘブライ語を習得する。アラブ人学生が、大学に入ってまず直面するのは言葉の壁だ。大学の授業はすべてヘブライ語で行われる。第二言語としてヘブライ語を学んでいても、それまでアラビア語で生活し、学校の授業もアラビア語で受けていた学生たちにとって、大学レベルの学問を、母語でない言語で学ぶのは容易いことではないはずだ。大学に入学したばかりだったアラブ人の私の友人は、初めて受けたテストの後、ヘブライ語の問題文が理解できなかったと嘆いていた。3月から中東でも新型コロナが流行りだした。その際も、保健省から出される新型コロナに関する情報は、当初ヘブライ語だけだった。市民の約21%を占めるアラビア語を母語とする人々に、自らの言語で情報を受け取る選択肢はなかった。きっと、アラブ人はアラブの文学を学ばなければいけないという彼のあの主張は、自らの母語が、この国において平等に扱われないことへの抗議なのだと今は思う。

ハイファには、ユダヤ人、アラブ人、どちらも暮らしている。学校で、仕事で、あるいは買い物をするため、ユダヤ人とアラブ人が言葉を交わすのは、よく見かける。だが、同じテーブルを囲んで、友人と親しく語り合うように、話し込んでいるところはめったに見かけない。たとえあったとしても、その会話はいつも決まってヘブライ語でなされる。アラブ系市民がヘブライ語を話さずにこの国で生きていくのは、不可能といってもいい。一方、ユダヤ人でアラビア語を流暢に話す人はほぼいない。ここまで言語の話をしてきたけれど、他の様々な日常の「当たり前」に関しても、認識の隔たりが大きすぎる。共生都市と呼ばれるハイファに暮らすユダヤ人とアラブ人でさえ、交わらない隣人だった。

声をあげて主張しなければ、「パレスチナ」もその歴史も、ここでは消えてゆく、消されていく一方だ。ハイファ大学での学びを終えた後、私はナザレに引っ越した。ハイファからナザレへ向かう高速からは、かつてパレスチナ人の町があった、サフーリーエが見える。サフーリーエは、1948年のナクバ（アラビア語で「大災厄」。イスラエル建国にともなう民族浄化のことをいう。）で破壊された、いくつものパレスチナ人の町のひとつだ。ナザレでは、その町から追い出され、国内難民となって、今はナザレの郊外に住んでいる家族に出会った。家々があったところには、その破壊された家の瓦礫を隠すように植えられたのであろう松の木がまばらに生えている。サフーリーエという名前はツィッポリに変えられ、パレスチナ人たちがそこで暮らしていたことの証跡が、文字どおり、消されようとしていた。

イスラエル内パレスチナ人。つまり、イスラエルの市民であってなお、自らはパレスチナ人だと主張する人々。この人々がアラブ系市民の大半を占める。大学でパレスチナ人の友人ができ、話を聞いているうちに、もっとイスラエル内パレスチナ人のことを知りたいと思った。大学の秋学期終了後から帰国までの2か月半、ナザレにあるパレスチナ人のNGO（I' LAM - Arab Center for Media Freedom, Development and Research）でボランティアとして働いた。イスラエル内パレスチナ人の首都とも言われるナザレに暮らし、そのコミュニティに浸かって、この人々は紛れもなく、西岸の、ガザの、あるいは難民となった人々と思いを同じくする、パレスチナ人なのだと確信した。それは、イスラエルのパスポートを持ち、その社会の一員として生きていても、「パレスチナ」の、パレスチナ人であることの、尊厳を主張してやまないからだ。「ユダヤ国家」において、二級市民としてのレッテルを張られたパレスチ

ナ人たちは、それでもその社会の内部から、日々、平等を求めて闘っていた。街角では、政府による差別的な扱いやパレスチナ人に対するヘイトに抗議してデモが行われ、私が働いていた NGO では、毎日のように活動家、研究者、メディア関係者など、あらゆる分野の人が集まり、ヘイトを乗り越え、コミュニティとして成長するための新たな取り組みについて、議論がなされていた。あるいは、デモやミーティングへ行かなくても、気を付けて見ればもっと身近なところに、さりげなく、でもはっきりと「パレスチナ」の主張があった。ナクバの象徴となっている「ハンダラ」のイラストが描かれたスマートフォンのケース、色あざやかなパレスチナ刺繍が施されたクッションカバー、パレスチナの形をしたネックレスなど、友人と話している時やその家族の家を訪れた時、町を歩いている時にも、それまで見過ごしていた「パレスチナ」を日常の至るところで見つけた。渡航先国名に括弧をつけたのは、私はイスラエルに留学した、そう言うってしまうことで、「パレスチナ」が消されていくことに抗ってその尊厳を主張する人たちを、無意識に抑圧するこの世界の大きな流れに、私も連なってしまわないかと思ったからだ。

今回の留学テーマ —交流と相互理解の諸相：ユダヤ人とアラブ人の生活と異文化交流から見えてくるもの— に沿って言えば、1948年のナクバとそれ以降の歴史的、政治的、社会的現実の中で、ユダヤ人とアラブ人との間には、まだ深い認識の溝があると言わざるを得ない。けれど他の社会と同様に、その二項対立には収まらない複雑性でこの社会も成り立っていた。パレスチナ人、イスラエル人、ロシア系、エチオピア系、イラン系、アメリカ系といったルーツの異なる人々が暮らし、キリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒、ドルーズなど宗教も様々である。社会は何層にも分かれ、同じ層の中でさえ、偏見と差別が存在する。それでも、ナショナル・アイデンティティ、宗教的アイデンティティに関わらず、私の友人は皆、自らのヴィジョンを持ってより良い未来を思い描き、社会を変えようと声をあげていた。

改めて、この地域を、国を、なんと呼ぶべきなのだろうか。その名に尊厳を求めてこの地域をパレスチナと呼ぶ人、この国が民主主義のあるべき姿へとなることを期待してイスラエルと呼ぶ人、あるいは内実が重要であって名前ではないという人。私が留学先で出会った人たちの中だけでも、意見は様々だ。

「イスラエルへの留学はどうだった？」

今の私に、最も頻繁に投げかけられる質問だ。どう答えればいいのか。その名前を正すべきなのだろうか、あるいは別のもっと良い答え方があるのだろうか。本当なら、どうだった、と尋ねてくれるひとりひとりに、長い時間をかけて、私が出会った人たちについての話をしたい。きっと、そうすることで、単なる「中立」とは違うナラティブ、つまり「パレスチナ」であった／であることの重みは失わず、同時にイスラエルという名の社会で日々、その複雑性の中に生きている人々の「声」を物語ることに少しは近づけるのではないだろうか。だが、毎回そんなことができるとも限らない。今の課題は、私の立場から、私の視点で、私なりの、この質問に対する一番伝わる答え方を見つけることだ。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

留学中、沢山の人の出会いがあった。中でもイスラエル内パレスチナ人たちと多くの時間を過ごした。その出会いのきっかけや親しくなった要因として、「食」でもてなす文化が大きな位置を占めていると思う。私が寮で出会ったパレスチナ人の友人たちも何かあるたびに、一緒にどう？と誘ってくれた。何か、と言っても理由は決まって「食」で、例えば、「今日はお母さんがマクルーベを届けてくれたから一緒にどう」とか、「クナーフェって食べたことある」とか。

それは、大学以外でも変わらず、ナザレに引っ越した後も、知り合った人はみな、食事に誘ってくれた。それも、「今日家でコーヒー（といっても必ず何か食べものも一緒に出てくる）どう」、「家族が集まる夕食に来ない」と、会って間もない人を家に招くことへの抵抗感のなさにびっくりする。

食事に誘われたことをきっかけにその後何度も通った友人の家では、パレスチナ人の家庭では定番のお米をブドウの葉で巻いて蒸した料理（ダワーレ）の作り方も教えてもらった。

美味しいことはもちろん、テーブルを囲んで会話も弾み、毎回とても楽しい時間を過ごした。

お米をブドウの葉で巻いているところ。きれいに巻くにはコツがある。→



↑友人の家での夕食。この日10人以上の家族が集まっていた。



↑コーヒーと一緒にナッツ類がたいてい出てくる。コーヒーに誘われておきながら、その前に食事をご馳走になったこともしばしば…。

## 今後の社会貢献

出発前、留学への期待と同時に、1年という短い期間でどれだけコミュニティに溶け込めるだろうか、若干の不安を抱いていた。今は、ハイファやナザレに行けば、自分でも驚くほど、たくさんの友人と温かく迎えてくれるその家族がいる。特に、イスラエル内パレスチナ人のコミュニティに魅了され、そこで多くの時間を過ごした。彼／彼女らへの感謝に代えて、日本では取り上げられることの少ないその人々の声を、私が生の体験を通して得た印象と共に、これからは届けていきたいと思う。

また、ナショナリティ、宗教アイデンティティに基づいた色々なコミュニティがあったけれど、そのどれにも属していなかった私は、どのコミュニティに行くのも自由だった。一つのコミュニティに留まっていれば、会うことのなかった人たち、聞くこともできなかった話に触れることができ、見えなかったであろう確執の原因にも気がついた。日本にいれば、自分がいるコミュニティ内で満足してしまいそうだが、その枠を超えて行動ができれば新たな気づきがあると、この留学を通して確信した。今私にできることは、私が既成の枠組みを超えて活動することで、周りの人に気づきと新たな視点をもたらすことだと思う。小さなことから少しずつ、貢献の範囲を広げていきたい。